



人の生と死をじっくりと考えてみませんか？

あらすじ

人間にとって永遠の課題である生と死。著者である南木佳士氏は、現役の医師としての立場から生と死をテーマとした作品を数多く発表している。そしてこの『ダイヤモンドダスト』で、彼は第100回芥川賞を受賞した。

活気のない町立病院に勤務する和夫は、父松吉と子正史との3人暮らし。開発によって大きく変貌してしまった町で、多くの老人の最期を看取りながら単調な生活を送っていた。だがいくつかの出来事をきっかけとして、和夫を取り巻く環境が大きく変化していくことになる。

ある日、松吉が脳卒中で倒れる。すると幼なじみの悦子が保育園まで正史を送り迎えしてくれるようになり、和夫は悦子のいる安定した生活を望むようになる。

また、院長が変わったことで徐々に活気を取り戻してきた病院に、マイク・チャンドラーという宣教師が入院してくる。足を骨折していた彼であったが、検査の結果肺に影が見つかる。そこからチャンドラーの死へのカウントダウンが始まっていく――。

生と死

悦子の登場による家庭での変化と、チャンドラーによってもたらされる病院での変化――これらがこの作品の2本柱だ。悦子が和夫の一家に1歩足を踏み入れたことで、それぞれの生活がどう変わっていくのか。そしてチャンドラーはどのようにして自分の死を受け入れようとしていくのか。和夫の周囲で繰り広げられる2つの物語がリンクしていく様子にも注目してほしい。

次に作品全体に視野を広げてみると、チャンドラーを中心とした登場人物のやり取りを通じて、医師である著者独自の死生観が所々で読者に向けられて

いることに気がつく。しかもそれらは読者の感動や涙を誘う悲劇の死ではなく、非常に現実的な死を通じて伝えられている。多くの死と向き合ってきた著者ならではのタッチで書かれているからこそ、作中に描かれている物語がまるで現実であるかのように顕現する。

リアルな死を描いたこの作品を読んで、一度人間の、そして家族や自分自身の生と死を考えてみてほしい。生きとし生けるものはこの世に生まれたがゆえに、いつかは必ず死してそこから旅立っていかねばならないのだから。

(onion)



著者：南木佳士

1951年、群馬県生まれ。秋田大学医学部卒業。『重い陽光』『活火山』『木の家』『エチオピアからの手紙』は第87、88、92、94回の芥川賞候補となった。1988年、『ダイヤモンドダスト』で第100回芥川賞を受賞する。現在でも年に数作のペースで作品を発表している。